5.7. 動詞の声調 [29]

名詞語幹の場合とは異なり，動詞語根には声調の対立がない。しかしながら，動詞の活用においては，声調は分節素と同様に文法範疇を決定する重要な機能を果たす。この節では，各活用形の声調パターン，および動詞を構成している各要素の声調を検討することで，マテンゴ語動詞の声調システムを解明する。

例として活用させる動詞は次のとおりである。O辞をつけた形では，それぞれ呼応させる目的語を右列に示した。これらのO辞は代名詞として機能をし，「それを～する」という意味になる。なお，いずれも後続語のない単文の形を例にあげるが，「非完了非当日」語尾の -adʒɛが用いられる単純過去形，単純未来形，移動未来形は，後続語のない単文では用いられない。他の活用形の場合から，単文と関係節の声調パターンに違いがないと判断し，「非完了非当日」語尾の声調を検討するために，関係節の単純過去形の例を用いる。

－O辞

(拡張辞なし)	-bag-	「配る」
(拡張辞なし)	-beŋg-	「追い払う」
(拡張辞１つ)	-gol-ol-	「食器を洗う」
(拡張辞１つ)	-kul-il-	「縁どりをする」
(拡張辞２つ)	-but-uk-il-	「追いかける」
(拡張辞３つ)	-leŋg-an-ak-e-	「作る」

＋O辞

			呼応させた目的語
(拡張辞なし)	-ga-bag-	「（果物を）配る」	mátunda (6)
(拡張辞なし)	-dʒi-beŋg-	「（ヤギを）追い払う」	ímbui (9)
(拡張辞１つ)	-lu-gol-ol-	「（皿を）洗う」	lúhǎgi (11)
(拡張辞１つ)	-dʒi-kul-il-	「（布を）縁どる」	íŋgɔbu (9)
(拡張辞２つ)	-dʒi-but-uk-il-	「（ヤギを）追いかける」	ímbui (9)
(拡張辞３つ)	-ki-leŋg-an-ak-e-	「（物を）作る」	síndu (7)

以下，各活用形の声調パターンを示していく。太字倍角は動詞語根を表わす。○ はL，● はHを表わし，これによって表層声調をモーラ単位で示す。H，L，F，Rの列は音節単位で表層声調を示したもので，アンダーラインはそれが２モーラであることを示す。なおこの節では，２モーラで現われる母音にはすべて長母音の印（：）を付す。

---

[29] 5.5.「活用要素」と 5.6.「動詞の活用」をはじめ，これまでにも動詞の構成要素の声調を示しているが，この節で示すことが，その根拠となっている。なお，この節は，「マテンゴ語動詞の声調（バンツー系，タンザニア）」『アジア・アフリカ言語文化研究』17号（1999）を訂正，加筆したものである。

5.7.1. 直説法の声調

5.7.1.1. 完了過去

時制辞： -a- ， 語尾： -itɛ 「我々は（昨日以前に）～した（完了した行為）」

−O辞	音節単位	モーラ単位
twabágî:tɛ	L **H** F L	○ ● ●○ ○
twabé:ŋgi:tɛ	L **H** L L	○ ●● ○○ ○
twagólwî:lɛ	L **H** F L	○ ● ●○ ○
twakū:li:lɛ	L **H** L L	○ ●● ○○ ○
twabútúki:le	L **H** H L L	○ ● ● ○○ ○
twaléŋgánaki:ɛ	L **H** H L L L	○ ● ● ○ ○○ ○
+ O辞		
twagábagî:tɛ	L H **L** F L	○ ● ○ ●○ ○
twidʒíbě:ŋgi:tɛ	L H **R** L L	○ ● ○● ○○ ○
tulúgolwî:lɛ	L H **L** F L	○ ● ○ ●○ ○
twidʒíkū:li:lɛ	L H **R** L L	○ ● ○● ○○ ○
twidʒíbutúki:lɛ	L H **L** H L L	○ ● ○ ● ○○ ○
twikíleŋgánaki:ɛ	L H **L** H L L L	○ ● ○ ● ○ ○○ ○

5.7.1.2. 単純過去

時制辞：-a-, 語尾： -adʒɛ 「我々が（昨日以前に）～したもの（関係節）」

−O辞	音節単位	モーラ単位
twa:bágâ:dʒɛ	L **H** F L	○○ ● ●○ ○
twa:bé:ŋga:dʒɛ	L **H** L L	○○ ●● ○○ ○
twagólúla:dʒɛ	L **H** H L L	○ ● ● ○○ ○
twakū:lila:dʒɛ	L **H** L L L	○ ●● ○ ○○ ○
twabútúkja:dʒɛ	L **H** H L L	○ ● ● ○○ ○
twaléŋgánakja:dʒɛ	L **H** H L L L	○ ● ● ○ ○○ ○
+ O辞		
twagábagâ:dʒɛ	L H **L** F L	○ ● ○ ●○ ○
twidʒíbéŋga:dʒɛ	L H **R** L L	○ ● ○● ○○ ○
tulúgolúla:dʒɛ	L H **L** H L L	○ ● ○ ● ○○ ○
twidʒíkūlila:dʒɛ	L H **R** L L L	○ ● ○● ○ ○○ ○
twidʒíbutúkja:dʒɛ	L H **L** H L L	○ ● ○ ● ○○ ○
twikíleŋgánakja:dʒɛ	L H **L** H L L L	○ ● ○ ● ○ ○○ ○

5.7.1.3. 当日過去

時制辞：なし，　語尾：拡張辞なし -it-ádʒɛ，拡張辞あり -ádʒɛ

「我々は（今日）～した」

− O辞	音節単位	モーラ単位
tubágitǎ:dʒɛ	L **H** L R L	○ ● ○ ○● ○
tubê:ŋgitǎ:dʒɛ	L **F** L R L	○ ●○ ○ ○● ○
tugólulǎ:dʒɛ	L **H** L R L	○ ● ○ ○● ○
tukû:lilǎ:dʒɛ	L **F** L R L	○ ●○ ○ ○● ○
tubútukjǎ:dʒɛ	L **H** L R L	○ ● ○ ○ ○● ○
tuléŋganakjǎ:dʒɛ	L **H** L L R L	○ ● ○ ○ ○● ○
+ O辞		
tugabágitǎ:dʒɛ	L L **H** L R L	○ ○ ● ○ ○● ○
tudʒibê:ŋgitǎ:dʒɛ	L L **F** L R L	○ ○ ●○ ○ ○● ○
tulugólulǎ:dʒɛ	L L **H** L R L	○ ○ ● ○ ○● ○
tudʒikû:lilǎ:dʒɛ	L L **F** L R L	○ ○ ●○ ○ ○● ○
tudʒibútukjǎ:dʒɛ	L L **H** L R L	○ ○ ● ○ ○ ○● ○
tukiléŋganakjǎ:dʒɛ	L L **H** L L R L	○ ○ ● ○ ○ ○● ○

5.7.1.4. 完了現在

時制辞：なし，　語尾：　-ití　「我々は（すでに）～した」

− O辞	音節単位	モーラ単位
tubágǐ:tɛ	L **H** R L	○ ● ○● ○
tubê:ŋgǐ:tɛ	L **F** R L	○ ●○ ○● ○
tugólwǐ:lɛ	L **H** R L	○ ● ○● ○
tukû:lǐ:lɛ	L **F** R L	○ ●○ ○● ○
tubútukǐ:lɛ	L **H** L R L	○ ● ○ ○● ○
tuléŋganakǐ:ɛ	L **H** L L R L	○ ● ○ ○ ○● ○
+ O辞		
tugabágǐ:tɛ	L L **H** R L	○ ○ ● ○● ○
tudʒibê:ŋgǐ:tɛ	L L **F** R L	○ ○ ●○ ○● ○
tulugólwǐ:lɛ	L L **H** R L	○ ○ ● ○● ○
tudʒikû:lǐ:lɛ	L L **F** R L	○ ○ ●○ ○● ○
tudʒibútukǐ:lɛ	L L **H** L R L	○ ○ ● ○ ○● ○
tukiléŋganakǐ:ɛ	L L **H** L L R L	○ ○ ● ○ ○ ○● ○

5.7.1.5. 単純現在

時制辞：なし，　語尾：　- a　　「我々は（いつも）～する」

− O辞	音節単位	モーラ単位
tubâ:ga	L F L	○ ●○ ○
tubê:ŋga	L F L	○ ●○ ○
tugólo:la	L H L L	○ ● ○○ ○
tukû:li:la	L F L L	○ ●○ ○○ ○
tubútuki:la	L H L L L	○ ● ○ ○○ ○
tuléŋganake:a	L H L L L L	○ ● ○ ○ ○○ ○
+ O辞		
tugába:ga	L H L L	○ ● ○○ ○
tudʒíbe:ŋga	L H L L	○ ● ○○ ○
tulúgolo:la	L H L L L	○ ● ○ ○○ ○
tudʒíku:li:la	L H L L L	○ ● ○○ ○○ ○
tudʒíbutuki:la	L H L L L L	○ ● ○ ○ ○○ ○
tukíleŋganake:a	L H L L L L L	○ ● ○ ○ ○ ○○ ○

5.7.1.6. 確認未来

時制辞：- í -,　語尾：　- a　　「我々は確かに（将来）～する」

− O辞	音節単位	モーラ単位
twǐ:ba:ga	R L L	○● ○○ ○
twǐ:be:ŋga	R L L	○● ○○ ○
twígolo:la	H L L L	● ○ ○○ ○
twíku:li:la	H L L L	● ○○ ○○ ○
twíbutuki:la	H L L L L	● ○ ○ ○○ ○
twíleŋganake:a	H L L L L L	● ○ ○ ○ ○○ ○
+ O辞		
twágaba:ga	H L L L	● ○ ○○ ○
twádʒibe:ŋga	H L L L	● ○ ○○ ○
twálugolo:la	H L L L L	● ○ ○ ○○ ○
twádʒiku:li:la	H L L L L	● ○ ○○ ○○ ○
twádʒibutuki:la	H L L L L L	● ○ ○ ○ ○○ ○
twákileŋganake:a	H L L L L L L	● ○ ○ ○ ○ ○○ ○

5.7.1.7. 確認移動未来

時制辞：-aká-,　語尾：　- a　　「我々は確かに ～しに行ってくる」

− O辞	音節単位	モーラ単位
twakába:ga	L H L L	○ ● ○○ ○
twakábe:ŋga	L H L L	○ ● ○○ ○
twakágolo:la	L H L L L	○ ● ○ ○○ ○
twakákuː:li:la	L H L L L	○ ● ○○ ○○ ○
twakábutuki:la	L H L L L L	○ ● ○ ○ ○○ ○
twakáleŋganake:a	L H L L L L L	○ ● ○ ○ ○ ○○ ○
+ O辞		
twakágaba:ga	L H L L L	○ ● ○ ○○ ○
twikídʒibe:ŋga	L H L L L	○ ● ○ ○○ ○
tukúlugolo:la	L H L L L L	○ ● ○ ○ ○○ ○
twikídʒikuː:li:la	L H L L L L	○ ● ○ ○○ ○○ ○
twikídʒibutuki:la	L H L L L L L	○ ● ○ ○ ○ ○○ ○
twikíkileŋganake:a	L H L L L L L L	○ ● ○ ○ ○ ○ ○○ ○

5.7.1.8. 直説法のまとめ

5.7.1.8.1. モーラ数

長母音の動詞語根および次末音節は２モーラであるが，その他に，Ｓ辞の母音が時制辞の母音と重なって半母音化することで，後続する母音が長母音化し２モーラになる。ただしこの場合も語根の長母音の場合と同様に，後ろに３音節以上続くと１モーラになる（3.2.2.参照）。完了語尾を用いる活用形では，語尾変化規則（5.5.3.2.3.参照）の結果，モーラ数を減らすことになることになる。

5.7.1.8.2. 各構成要素の声調に関する概観と分析

Ｈの現われ方を見ると，単純現在形，確認未来形，確認移動形，すなわち基本語尾 -a を用いる活用形ではＨはひとつ現われている。それに対して，それ以外の活用形，すなわち完了過去形，単純過去形，完了現在形，当日過去形では，すべてＨが２つ現われている。そこで，基本語尾を用いる活用形とそれ以外の語尾を用いる活用形に分けて，各要素の声調について考えていくことにする。

5.7.1.8.2.1. 基本語尾 -a以外が用いられる活用形

時制辞は，-a-はＬ（完了過去形，単純過去形），-í- はＨ（確認未来形），-aká-はＬＨ（確認移動未来），で現われる。Ｏ辞が入ることで時制辞の母音が変わっても声調は同じで，他の要素に影響されることなく現われている。Ｓ辞は，時制辞が後続しない場合にはＬで現われている。Ｏ辞，およびＯ辞が付かない場合の語根は，Ｌの時制辞に先行される場合（完了過去形，単純過去形）にはＨで現われ，Ｈの時制辞に先行される場合（確認未来形，確認移動未来形）にはＬで現われている。すなわち時制辞の右隣の要素は常に時制辞と逆の声調で現われるということになる。一方，時制辞が付加されず先行するのがＳ辞の場合（当日過去形，完了現在形）には，Ｏ辞はＬ，語根（の１モーラめ）はＨ[30]でそれぞれ現われており，Ｓ辞の右隣の声調が必ずしも逆の声調で現われてるわけではない。このことからＳ辞の声調は右隣に影響を与えていないと考えれば，他からの影響ではなく積極的にＨで現われている語根は，元来Ｈという声調を有していると考えられる。

拡張辞（および語根２モーラめ）は，当日過去形と完了現在形のように語尾にＨがある場合にはすべてＬで現われ，完了過去形と単純過去形のように語尾にＨがない場合には最初のモーラだけＨであとはＬ，という現われ方をしている。最初のモーラのＨを語根のＨが右隣のモーラに拡張したものであると考えれば，「語根のＨは右隣のモーラに拡張するが，語尾にＨがある場合にはその拡張をブロックする」という規則でこの現象を説明することができる。

さて，このように考えていくと，時制辞がＬでＯ辞がその逆のＨで現われる完了過去形（＋Ｏ辞）と単純過去形（＋Ｏ辞）の場合には，Ｏ辞，語根，語根の右隣，という３つのＨが並ぶことになる。しかし実際にはこれらの活用形では語根はＬで現われている。語根がＬで現われていることについては，後で述べる活用形の中に語根とＯ辞が同じ声調で現われている例もあるので「語根は常にＯ辞の声調とは逆声調で現われる」という理由は当てはまらない。また，語根の右隣にＨが拡張されているのであるから，語根のＨは早い時点ではキャンセルされていないはずである。そこで，ある時点ではこれら３つのＨが並んだと仮定して次のような規則を考えてみる。

「Ｈが３つ現われた場合には，両端を残して真ん中のＨはキャンセルされる」

どの活用形を見てもＨが３つ（あるいはそれ以上）現われる例がないこともこの規則を

[30] 3.4.「声調」で述べたとおり，声調はモーラ単位で配分されるので，２モーラの語根の場合であれば１モーラめがＨになり，音節としての声調はＦとなる。

裏付けている。

次に語尾の声調について検討してみよう。完了過去形で -iti / -îti という現われ方をしている語尾と，完了現在形で -ĭtiという現われ方をしている語尾は，分節素も同じであり「完了」という意味的な共通点もあるため，同じ語尾であると考えられるが，声調の現われ方が異なっている。これらの活用形を構成している要素は，時制辞を除けばすべて同じであるから，もし完了過去形と完了現在形で用いられている語尾を同じものであると考えるならば，その現われ方を違えているものは時制辞ということになる。しかしながら時制辞と語尾の間には，時制辞の影響を受けるO辞や語尾の影響を受ける拡張辞がある。それらの要素を超えて時制辞が語尾に直接音韻的に影響するとは考えにくい。従って，これらはもともと異なる基底声調を有していると考えるべきであろう [31]。単純過去形で -adʒɛと現われている語尾と当日過去形で -ǎdʒɛ と現われている語尾についても同様のことが言える。

完了過去形に用いられている語尾と単純過去形に用いられている語尾は，いずれも語根のHが語尾の１モーラめに拡張してきている場合にはＦＬで現われているが，それ以外は常にＬＬであるから，これは基底声調にHを持っていないと考えられる。

さて，当日過去形に用いられている語尾-ǎdʒɛと完了現在形に用いられている語尾 -ĭtɛの表層声調はいずれもＲＬであるが，それぞれに後続語をつけてみると次のような違いが出てくる。

1) tu-gól-ul-ǎdʒɛ → tugólulá kibêga「我々は今日土鍋を洗った（当日過去）」
2) tu-gól-w-ĭlɛ → tugólwi kibêga 「我々はすでに土鍋を洗った（完了現在）」

前節で述べたとおり，完了語尾-itiが付加されて語尾変化規則の結果/li/となった語末音節と，後続語がある場合の非完了語尾-adʒɛの/dʒɛ/ は脱落する（5.5.3.7.参照）。例１の当日過去形では単純に最終音節が脱落しただけであるが，例２の完了現在形では最終音節が脱落するだけではなく，その前にあったH[32]がなくなっている。つまり，完了現在形で用いられていた語尾のHは，元来は脱落した最終音節に属していて，後続語がない形では，

[31] 活用形自体に声調形の指定があるとも考えられるが，本論文では活用形を構成している語尾の違いと考えることにする。

[32] -adʒɛの /a/，-ilɛの /i/は，次末に位置しているため２モーラになり，このHは音節としてはRで現われている。

それがポーズの直前にあったために左にずれて現われていたと考えられる。このことは，例3のように後続語があっても動詞の最終音節が脱落しない例，例えば語尾変化規則の結果，語末音節が/li/にならなかった場合（5.5.3.7.参照）を見ると明らかになる。

3) dʒi-tún-w-ĭki → dʒitúnwikí ṃbêu　　ＬＬＬＨ　ＬＦＬ

「杖が折れた（完了現在）」

つまり，当日過去形に用いられた語尾の基底声調はＨＬ（-ádʒɛ），それに対して完了現在形に用いられた語尾の基底声調はＬＨ（-ití）であると考えられる。

しかしながら，ここで別の疑問が浮上する。Ｈをもつ音節が２モーラで現われる場合，通常はその音節の１モーラめがＨ（つまり音節としてはＦ）になる。しかし当日過去形の語尾の場合には，２モーラとなっている次末音節の２モーラめがＨ（音節としてはＲ）になっている。

これに対する説明の可能性としては，まず，「当日過去形の語尾の基底声調は，完了現在形の場合と同じくＬＨ（つまり-adʒɛ́）だが，当日過去形の語尾の場合は最終音節が脱落するときにＨだけ左にずれて残る」という考え方がある。しかしながら，後述するように，希求形に用いられる語尾 -ǎdʒɛの基底声調はＬＨであると思われるが，この語尾の場合にはＨは最終音節が脱落するときにいっしょに脱落している。従って，これとは異なる現われ方をする当日過去形の語尾の声調はＬＨではない。また先に述べたとおり，当日過去形の語尾は単純過去形に用いられる -adʒɛ（ＬＬ）とも現われ方が異なっている。これらのことから，当日過去形の語尾の声調はやはりＨＬと考えるべきであり，上記の説明は妥当ではない。

そこで今度は声調の配列について考え直す必要がでてくる。名詞や動詞語根といったこれまで見てきた例では，Ｈをもつ音節が２モーラになった場合には，Ｈは１モーラめに配分され，音節としてはＦで現われていた。しかしながら，当日過去形の語尾がＦＬではなくＲＬで現われていることから，Ｈをもつ音節が２モーラになった場合に，Ｈが２モーラめに配分されて，音節としてはＲで現われることもある，という例外を考えなければならない[33]。

---

[33] 基底声調がＨＬであると思われる語尾は当日過去形に用いられている語尾だけである。従ってこの例外が「語尾」全体に係る例外なのか，あるいは「非完了当日語尾」のみに係るものなのか，検証することはできない。

5.7.1.8.2.2. 基本語尾 -aが用いられる活用形

単純現在形を完了現在形や当日過去形と比べると，語尾以外の要素はすべて同じであるが，それらは異なった声調で現われている。語尾以外の要素が同じなのであるなら，この違いは語尾にあると考えられる。また単純現在形では語尾にHがないにも拘わらず語根のHが右隣に拡張していないことから，語尾のH以外のものが拡張をブロックしているか，あるいは語根のH自体が早い時点でキャンセルされたと考えられる。

5.7.1.8.2.1.「基本語尾以外が用いられる活用形」で見てきたように，語根の後ろに位置する要素で積極的に声調に関与するものは語尾以外にはない。そこで基本語尾-aがHの拡張をブロックしていると仮定してみよう。O辞が付かない場合には，この仮定で説明がつく。しかし，O辞が付く場合を見ると，完了現在形と当日過去形ではO辞がLで現われているにも拘わらず，単純現在形ではHで現われていることについては説明がつかない。

次に基本語尾 -aには語根のHをキャンセルさせる性質があると仮定してみよう。語根のHがキャンセルされているのであれば当然右隣にHが拡張されることはない。Hがキャンセルされた単純現在形では，Hをもつ時制辞も語尾も付かないのであるから，Hが全くなくなってしまうことになる。しかし実際にはO辞が入っている場合にも入らない場合にも前から２番めのモーラがHで現われている。これは名詞にも見られた現象である。５クラスの名詞クラス接頭辞 li -（L）と６クラスの名詞クラス接頭辞 má -（H）のそれぞれに，Lのみの名詞語根とHのある名詞語根を続けると次のようになる。

-tɛlɛku (LLL)		- dʒɔdʒɔ́la (LHL)	
li-tɛ́lɛku (L-HLL)	「調理鍋 sg.」< L-LLL	li-dʒɔdʒɔ́la (L-LHL)	「肺 sg.」
má-tɛlɛku (H-LLL)	「調理鍋 pl.」	má-dʒɔdʒɔ́la (H-LHL)	「肺 pl.」

4.1.4.「名詞の声調」で述べたように，マテンゴ語には，単独で発音した場合にHが全く現われないという名詞はない。 li-tɛlɛku「調理鍋 sg.」のように，Lの名詞クラス接頭辞とHのない語根が結合して名詞の中にHが全くない場合には，語根頭，つまり前から２つめのがHとなる。従って，動詞の場合にも，動詞の中にHがない場合には前から２つめ，つまりO辞があるときにはO辞，O辞がないときには語根の１モーラめがHで現われていると考えらる[34]。

---

[34] しかしながら，例えば単純現在形であれば，ひとつしかないHを一旦キャンセルした上で，再び新たなHを設ける，という規則は合理的とは言い難い。基本語尾は「語根のHをキャンセルする」のではなく「Hの位置を移動させる」性質を持っている，あるいは基本語尾自体の基底声調がHで，それが前方にずれて現われている，といった別の考える方についても検討する必要がある。

5.7.1.8.3. 考えられる規則

以上の分析，および本章の接辞の説明などで触れてきた事柄も含めて，マテンゴ語動詞の声調に関する仮説は以下のようにまとめられる。

①各要素の基底声調と性質

時制辞：	過去	-a-	L
	未来	-í-	H
	移動	-aká-	L H
語尾：	完了過去	-iti	L L
	完了現在	-ití	L H
	非完了当日	-ádʒɛ	H L
	非完了非当日	-adʒɛ	L L
	基本語尾	-a	L

語根： H　ただし，時制辞，語尾の声調あるいは性質に優先される

S辞，O辞，拡張辞： 特定の声調を持たない（指定がなければLで現われる）

②「基本語尾の規則」…基本語尾は語根のHをキャンセルする。

③音韻規則　（適用順）

(1) 語尾にHがない場合には，語根のHは右隣のモーラに拡張する。

(2) 時制辞の右隣の要素は時制辞と逆の声調で現われる。

(3) Hが３つ現われた場合，中央に位置するHはキャンセルされる。

(4) ポーズ直前のHは左隣にずれて現われる。

(5) Hが全くない場合には前から２つめのモーラがHになる

上記の規則が適用される前に，以下のようにモーラ数が決定される。

i．完了語尾は「語尾変化規則」で１モーラ少なくなる。

ii．時制辞が付いてS辞の母音が半母音化した場合，後ろに３音節以上続けば短母音化して１モーラ少なくなる。

iii．次末音節は常に２モーラになる。

モーラ数が決定された後，まず②の「基本語尾の規則」，その次に③の音韻規則が，(1)～(5)の順で適用される。

以上のことを各活用形にあてはめてみると，次のようになる。

5.7.1.1 完了過去

－O辞

tu	a	bú	tu	ki	li	ti	
○	○	●	○	○	○	○	基底声調
○	○	●	○	○	○		モーラ数決定 i
○		●	○	○	○		モーラ数決定 ii
○		●	○	○○	○		モーラ数決定 iii
○		●	●	○○	○		規則 1
twa		bú	tú	ki:	lɛ		

＋O辞

tu	a	dʒi	bú	tu	ki	li	ti	
○	○	○	●	○	○	○	○	基底声調
○	○	○	●	○	○		○	モーラ数決定 i
○		○	●	○	○		○	モーラ数決定 ii
○		○	●	○	○○		○	モーラ数決定 iii
○		○	●	●	○○		○	規則 1
○		●	●	●	○○		○	規則 2
○		●	○	●	○○		○	規則 3
twi		dʒí	bu	tú	ki:		lɛ	

5.7.1.2 単純過去

非完了語尾 -adʒɛの前に拡大辞 -il- が位置する場合には，その子音/ l /は脱落する。残った母音/ i /は半母音化して，その直前にある子音と結合する（5.5.3.2.3.参照）。

bu. tu. k - i.l - a.dʒɛ → bu. tu. kj - a.dʒɛ

結果的に音節数は１つ減少するが，半母音の後ろに来る母音，つまり非完了語尾の母音/ a /が長母音化するので，モーラ数に変化はない。この点で「モーラ数決定 i」

の場合とは異なる。ただし，このことによって「モーラ数決定iii」が適用されなくなるので，声調の表層化過程は異なってくる。そこで，過程を明確にするために，「1音節化」として示した。

－O辞

tu	a	bú	tu	ki	la	dʒɛ	
○	○	●	○	○	○	○	基底声調
○	○	●	○	○○		○	「1音節化」
○		●	○	○○		○	モーラ数決定ii
○		●	●	○○		○	規則1
twa		bú	tú	kja:		dʒɛ	

＋O辞

tu	a	dʒi	bú	tu	ki	la	dʒɛ	
○	○	○	●	○	○	○	○	基底声調
○	○	○	●	○	○○		○	「1音節化」
	○	○	●	○	○○		○	モーラ数決定ii
	○	○	●	●	○○		○	規則1
	○	●	●	●	○○		○	規則2
	○	●	○	●	○○		○	規則3
	twi	dʒí	bu	tú	kja:		dʒɛ	

「1音節化」が起こらない場合

－O辞

tu	a	gó	lu	la	dʒɛ	
○	○	●	○	○	○	基底声調
	○	●	○	○	○	モーラ数決定ii
	○	●	○	○○	○	モーラ数決定iii
	○	●	●	○○	○	規則1
	twa	gó	lú	la:	dʒɛ	

5.7.1.3. 当日過去

－ O辞

tu	bú	tu	ki	lá	dʒɛ	
○	●	○	○	●	○	基底声調
○	●	○	○●		○	「1音節化」
tu	bú	tu	kjă:		dʒɛ	

＋ O辞

tu	dʒi	bú	tu	ki	lá	dʒɛ	
○	○	●	○	○	●	○	基底声調
○	○	●	○	○●		○	「1音節化」
tu	dʒi	bú	tu	kjă:		dʒɛ	

「1音節化」が起こらない場合

－ O辞

tu	bá	gi	tá	dʒɛ	
○	●	○	●	○	基底声調
○	●	○	○●	○	モーラ数決定iii
tu	bá	gi	tă:	dʒɛ	

＋ O辞

tu	ga	bá	gi	tá	dʒɛ	
○	○	●	○	●	○	基底声調
○	○	●	○	○●	○	モーラ数決定iii
tu	ga	bá	gi	tă:	dʒɛ	

5.7.1.4. 完了現在

－O辞

tu	bú	tu	ki	li	tí	
○	●	○	○	○	●	基底声調
○	●	○	○		●	モーラ数決定 i
○	●	○	○○		●	モーラ数決定iii
○	●	○	○●		○	規則4
tu	bú	tu	kĭ:		lɛ	

＋O辞

tu	dʒi	bú	tu	ki	li	tí	
○	○	●	○	○	○	●	基底声調
○	○	●	○	○	●		モーラ数決定 i
○	○	●	○	○○	●		モーラ数決定 iii
○	○	●	○	○●	○		規則４
tu	dʒi	bú	tu	kĭ:	lɛ		

5.7.1.5. 単純現在

－O辞

tu	bú	tu	ki	la	
○	●	○	○	○	基底声調
○	●	○	○○	○	モーラ数決定 iii
○	○	○	○○	○	基本語尾の規則
○	●	○	○○	○	規則５
tu	bú	tu	ki:	la	

＋O辞

tu	dʒi	bú	tu	ki	la	
○	○	●	○	○	○	基底声調
○	○	●	○	○○	○	モーラ数決定 iii
○	○	○	○	○○	○	基本語尾の規則
○	●	○	○	○○	○	規則５
tu	dʒí	bu	tu	ki:	la	

5.7.1.6. 確認未来

－O辞

tu	í	bú	tu	ki	la	
○	●	●	○	○	○	基底声調
	●	●	○	○	○	モーラ数決定 ii
	●	●	○	○○	○	モーラ数決定 iii
	●	○	○	○○	○	基本語尾の規則
	twí	bu	tu	ki:	la	

＋O辞

tu	í	dʒi	bú	tu	ki	la	
○	●	○	●	○	○	○	基底声調
●		○	●	○	○	○	モーラ数決定 ii
●		○	●	○	○○	○	モーラ数決定 iii
●		○	○	○	○○	○	基本語尾の規則
twá		dʒi	bu	tu	ki:	la	

5.7.1.7. 確認移動未来

－O辞

tu	a	ká	bú	tu	ki	la	
○	○	●	●	○	○	○	基底声調
	○	●	●	○	○	○	モーラ数決定 ii
	○	●	●	○	○○	○	モーラ数決定 iii
	○	●	○	○	○○	○	基本語尾の規則
twa		ká	bu	tu	ki:	la	

＋O辞

tu	a	ká	dʒi	bú	tu	ki	la	
○	○	●	○	●	○	○	○	基底声調
	○	●	○	●	○	○	○	モーラ数決定 ii
	○	●	○	●	○	○○	○	モーラ数決定 iii
	○	●	○	○	○	○○	○	基本語尾の規則
twi		kí	dʒi	bu	tu	ki:	la	

5.7.2. 接続法の声調

5.7.2.1. 現在接続

時制辞：なし，　語尾：O辞なし -i，O辞あり -í　　「（今から）～しましょう」

－ O辞	音節単位	モーラ単位
tubâ:gɛ	L **F** L	○ ●○ ○
tubê:ŋgɛ	L **F** L	○ ●○ ○
tugólô:lɛ	L **H** F L	○ ● ●○ ○
tukú:li:lɛ	L **H** L L	○ ●● ○○ ○
tubútúki:lɛ	L **H** H L L	○ ● ● ○○ ○
tuléŋgánake:ɛ	L **H** H L L L	○ ● ● ○ ○○ ○

＋ O辞

tugabâ:gɛ	L L **F** L	○ ○ ●○ ○
tudʒibê:ŋgɛ	L L **F** L	○ ○ ●○ ○
tulugólŏ:lɛ	L L **H** R L	○ ○ ● ○● ○
tudʒikû:lǐ:lɛ	L L **F** R L	○ ○ ●○ ○● ○
tudʒibútukǐ:lɛ	L L **H** L R L	○ ○ ● ○ ○● ○
tukiléŋganakě:ɛ	L L **H** L L R L	○ ○ ● ○ ○ ○● ○

5.7.2.2. 未来接続

時制辞：O辞なし -i-, O辞あり -í-, 語尾：-í 「（後で）～しましょう」

－O辞	音節単位	モーラ単位
twi:bâ:gɛ	L **F** L	○○ ●○ ○
twi:bê:ŋgɛ	L **F** L	○○ ●○ ○
twigólŏ:lɛ	L **H** R L	○ ● ○● ○
twikû:lǐ:lɛ	L **F** R L	○ ●○ ○● ○
twibútukǐ:lɛ	L **H** L R L	○ ● ○ ○● ○
twiléŋganakě:ɛ	L **H** L L R L	○ ● ○ ○ ○● ○
＋O辞		
twágabă:gɛ	H L **R** L	● ○ ○● ○
twádʒibě:ŋgɛ	H L **R** L	● ○ ○● ○
twálugolŏ:lɛ	H L **L** R L	● ○ ○ ○● ○
twádʒikụ:lǐ:lɛ	H L **L** R L	● ○ ○○ ○● ○
twádʒibutukǐ:lɛ	H L **L** L R L	● ○ ○ ○ ○● ○
twákileŋganakě:ɛ	H L **L** L L R L	● ○ ○ ○ ○ ○● ○

5.7.2.3. 移動接続

時制辞：O辞なし -aka-, O辞あり -aká-, 語尾：-í 「～してきましょう」

－O辞	音節単位	モーラ単位
twakabâ:gɛ	L L **F** L	○ ○ ●○ ○
twakabê:ŋgɛ	L L **F** L	○ ○ ●○ ○
twakagólŏ:lɛ	L L **H** R L	○ ○ ● ○● ○
twakakû:lǐ:lɛ	L L **F** R L	○ ○ ●○ ○● ○
twakabútukǐ:lɛ	L L **H** L R L	○ ○ ● ○ ○● ○
twakaléŋganakě:ɛ	L L **H** L L R L	○ ○ ● ○ ○ ○● ○

＋O辞

twakágabă:gɛ	L H L **R** L	○ ● ○ ○● ○
twikídʒibĕ:ŋgɛ	L H L **R** L	○ ● ○ ○● ○
tukúlugolŏ:lɛ	L H L **L** R L	○ ● ○ ○ ○● ○
twikídʒikụ:lĭ:lɛ	L H L **L** R L	○ ● ○ ○○ ○● ○
twikídʒibutukĭ:lɛ	L H L **L** L R L	○ ● ○ ○ ○ ○●
twikíkileŋganakĕ:ɛ	L H L **L** L L R L	○ ● ○ ○ ○ ○ ○● ○

5.7.2.4. 接続法のまとめ

接続法では，O辞がついた形と付かない形で時制辞の声調が異なる，という直説法にはなかった現象が見られる（未来接続形，移動接続形）。接続法で用いられている時制辞と直説法で用いられている時制辞が同じものであると考えるならば，5.7.1.8.3.であげた時制辞の声調は，O辞が付いた形のほうに現われている。つまり，接続法では，O辞が付加される場合を除き，時制辞は直説法とは異なる声調で現われる。時制辞が付かない現在接続形では，語尾の声調の現われ方が，O辞の有無によって異なっている。

このような現象，すなわち，O辞が付かない形に用いられる時制辞（および語尾）の声調が，直説法やO辞の付く形の接続法で用いられるもとは異なる，ということに関して，後述（P223）の解釈の中では，それらの基底声調が異なっているとして表わしている。しかしながら実際には，それらが基底の段階から異なるものなのか，それとも表面化するにあたって適用された規則によるものなのか定かではない。いずれにしても，音韻的な理由によるものではなく，活用形自体に由来するものであると考えられる。

さて，語尾の声調であるが，語尾 -i はそれ自体はLで現われ，直前にHが現われている。これは完了現在形の語尾の場合と同様，本来は -i がHであるが，ポーズの直前に位置しているためにHが左隣にずれて現われているのである。例2のように，後続語が続く形ではHの語尾が省略されているので，/ lo /にずれて現われていたHも消える。

4) twigólŏ:lɛ　　cf. twigólo　kibê:ga　「土鍋を洗いましょう（未来接続）」

ただし拡張辞が付かない動詞の場合，すなわち語根のHと語尾のHが隣接する場合にはHが現われていないことから，規則4を次のように訂正する必要がある。

『ポーズの直前のHは左隣にずれて現われる。ただし，ずれることでそれがもともとあったHと連続してしまう場合は，左隣にずれることなくキャンセルされる 』

以上のことから接続法の各活用形の声調パターンを解釈してみると，以下のようになる。

5.7.2.1 現在接続

－ O辞

tu	bú	tu	ki	li	
○	●	○	○	○	基底声調
○	●	○	○○	○	モーラ数決定 iii
○	●	●	○○	○	規則 1
tu	bú	tú	ki:	lɛ	

＋ O辞

tu	dʒi	bú	tu	ki	lí	
○	○	●	○	○	●	基底声調
○	○	●	○	○○	●	モーラ数決定 iii
○	○	●	○	○●	○	規則 4
tu	dʒi	bú	tu	ki:	lɛ	

5.7.2.2 未来接続

－ O辞

tu	i	bú	tu	ki	lí	
○	○	●	○	○	●	基底声調
	○	●	○	○	●	モーラ数決定 ii
	○	●	○	○○	●	モーラ数決定 iii
	○	●	○	○●	○	規則 4
	twi	bú	tu	ki:	lɛ	

＋ O辞

tu	í	dʒi	bú	tu	ki	lí	
○	●	○	●	○	○	●	基底声調
	●	○	●	○	○	●	モーラ数決定 ii
	●	○	●	○	○○	●	モーラ数決定 iii
	●	○	○	○	○○	●	規則 3
	●	○	○	○	○●	○	規則 4
	twá	dʒi	bu	tu	ki:	lɛ	

5.7.2.3 移動接続

− O辞

tu	a	ka	bú	tu	ki	lí	
○	○	○	●	○	○	●	基底声調
	○	○	●	○	○	●	モーラ数決定 ii
	○	○	●	○	○○	●	モーラ数決定 iii
	○	○	●	○	○●	○	規則４
	twa	ka	bú	tu	kǐ:	lɛ	

＋ O辞

tu	a	ká	dʒi	bú	tu	ki	lí	
○	○	●	○	●	○	○	●	基底声調
	○	●	○	●	○	○	●	モーラ数決定 ii
	○	●	○	●	○	○○	●	モーラ数決定 iii
	○	●	○	○	○	○○	●	規則３
	○	●	○	○	○	○●	○	規則４
	twi	kí	dʒi	bu	tu	kǐ:	lɛ	

5.7.3. 希求法の声調

5.7.3.1. 現在希求

時制辞：なし，　語尾：O辞なし - adʒɛ，O辞あり -adʒɛ́

「（今から）～ しなさいよ」

− O辞	音節単位	モーラ単位
gubágâ:dʒɛ	L **H** F L	○ ● ●○ ○
gubɛ̱:ŋga:dʒɛ	L **H** L L	○ ●● ○○ ○
gugólúla:dʒɛ	L **H** H L L	○ ● ● ○○ ○
gukṵ:lila:dʒɛ	L **H** L L L	○ ●● ○ ○○ ○
gubútúkja:dʒɛ	L **H** H L L	○ ● ● ○○ ○
gulɛ́ŋgánakja:dʒɛ	L **H** H L L L	○ ● ● ○ ○○ ○
＋ O辞		
gugabágă:dʒɛ	L L **H** R L	○ ○ ● ○● ○
gudʒibê:ŋgă:dʒɛ	L L F R L	○ ○ ●○ ○● ○
gulugólulă:dʒɛ	L L **H** L R L	○ ○ ● ○ ○● ○
gudʒikṵ̂:lilă:dʒɛ	L L F L R L	○ ○ ●○ ○ ○● ○

gudʒibútukjă:dʒɛ	L L **H** L R L	○ ○ ● ○ ○● ○
gukiléŋganakjă:dʒɛ	L L **H** L L R L	○ ○ ● ○ ○ ○● ○

5.7.3.2. 未来希求

時制辞：-i-,　　語尾： -adʒɛ́　　「（後から）～しなさいよ」

－O辞	音節単位	モーラ単位
gwibágă:dʒɛ	L **H** R L	○ ● ○● ○
gwibê:ŋgă:dʒɛ	L F R L	○ ●○ ○● ○
gwigólulă:dʒɛ	L **H** L R L	○ ● ○ ○● ○
gwikû:lilă:dʒɛ	L F L R L	○ ●○ ○ ○● ○
gwibútukjă:dʒɛ	L **H** L L R L	○ ● ○ ○ ○● ○
gwiléŋganakjă:dʒɛ	L **H** L L R L	○ ● ○ ○ ○● ○

5.7.3.3. 移動希求

時制辞： -aka-,　語尾：-adʒɛ́　　「～しに行きなさいよ」

- O辞	音節単位	モーラ単位
gwakabágă:dʒɛ	L L **H** R L	○ ○ ● ○● ○
gwakabê:ŋgă:dʒɛ	L L F R L	○ ○ ●○ ○● ○
gwakagólulă:dʒɛ	L L **H** L R L	○ ○ ● ○ ○● ○
gwakakû:lilă:dʒɛ	L L F L R L	○ ○ ●○ ○ ○● ○
gwakabútukjă:dʒɛ	L L **H** L R L	○ ○ ● ○ ○● ○
gwakaléŋganakjă:dʒɛ	L L **H** L L R L	○ ○ ● ○ ○ ○● ○

5.7.3.4. 希求法のまとめ

希求法でも，O辞がついた形と付かない形で時制辞の声調が異なる，という接続法と同じ現象が見られる。つまり，希求法でも，O辞が付加される場合を除き，時制辞は直説法とは異なる声調で現われる。時制辞が付かない現在希求形では，語尾の声調の現われ方が，O辞の有無によって異なっている。

希求法で用いられる語尾は，当日過去形で用いられる語尾と同じ分節素からなる。しかしながら例４が示すように，希求法の場合には後続語が付くと，完了現在形の場合と同じく，動詞の最終音節が脱落すると同時にその前のHも消えている。つまりHは本来脱落した最終音節にあったものである。従って，希求法で用いられている語尾は -adʒɛ́（L H）であって，当日過去形あるいは単純過去形で用いられる語尾とは別の基底声調をもつ。

4) gwigólulă:dʒɛ → gwigólula kibê:ga 「土鍋を洗いなさい（未来希求）」

希求法の各活用形の声調パターンは，次のように解釈される。非完了語尾が用いられる活用形と同様に「１音節化」が起こる（P216参照）。

5.7.3.1 現在希求

－ O辞

tu	bú	tu	ki	la	dʒɛ	
○	●	○	○	○	○	基底声調
○	●	○	○○		○	「１音節化」
○	●	●	○○		○	規則１
tu	bú	tú	kja:		dʒɛ	

＋ O辞

tu	dʒi	bú	tu	ki	la	dʒɛ́	
○	○	●	○	○	○	●	基底声調
○	○	●	○	○○		●	「１音節化」
○	○	●	○	○●		○	規則１
tu	dʒi	bú	tu	kjă:		dʒɛ	

「１音節化」が起こらない場合

－ O辞

tu	bá	ga	dʒɛ	
○	●	○	○	基底声調
○	●	○○	○	モーラ数決定 iii
○	●	●○	○	規則１
tu	bá	gâ:	dʒɛ	

＋ O辞

tu	ga	bá	ga	dʒɛ́	
○	○	●	○	●	基底声調
○	○	●	○○	●	モーラ数決定 iii
○	○	●	○●	○	規則４
tu	ga	bá	gă:	dʒɛ	

5.7.3.2 未来希求

— ○辞

tu	i	bú	tu	ki	la	dʒɛ́	
○	○	●	○	○	○	●	基底声調
○	○	●	○	○○		●	「1音節化」
○		●	○	○○		●	モーラ数決定 ii
○		●	○	○●		○	規則4
twi		bú	tu	kjă:		dʒɛ	

「1音節化」が起こらない場合

tu	i	gó	lu	la	dʒɛ́	
○	○	●	○	○	●	基底声調
○		●	○	○	●	モーラ数決定 ii
○		●	○	○○	●	モーラ数決定 iii
○		●	○	○●	○	規則4
twi		gó	lu	lă:	dʒɛ	

5.7.3.3 移動希求

— ○辞

tu	a	ka	bú	tu	ki	la	dʒɛ́	
○	○	○	●	○	○	○	●	基底声調
○	○	○	●	○	○○		●	「1音節化」
	○	○	●	○	○○		●	モーラ数決定 ii
	○	○	●	○	○●		○	規則4
	twa	ka	bú	tu	kjă:		dʒɛ	

「1音節化」が起こらない場合

tu	a	ka	gó	lu	la	dʒɛ́	
○	○	○	●	○	○	●	基底声調
○		○	●	○	○	●	モーラ数決定 ii
○		○	●	○	○○	●	モーラ数決定 iii
○		○	○	○	○●	○	規則4
twa		ka	gó	lu	lă:	dʒɛ	

5.7.4. 否定接続法と禁止法の声調

5.7.4.1. 否定接続

否定辞：-i- ，語尾： -á 「我々は ～しないほうがいい」

- O辞	音節単位	モーラ単位
twibă:ga	L **R** L	○○ ○● ○
twibĕ:ŋga	L **R** L	○○ ○● ○
twigolŏ:la	L **L** R L	○ ○ ○● ○
twikṵ:lĭ:la	L **L** R L	○ ○○ ○● ○
twibutukĭ:la	L **L** L R L	○ ○ ○ ○● ○
twileŋganakĕ:a	L **L** L L R L	○ ○ ○ ○ ○● ○
+ O辞		
twagabă:ga	L L **R** L	○ ○ ○● ○
twadʒibĕ:ŋga	L L **R** L	○ ○ ○● ○
twalugolŏ:la	L L **L** R L	○ ○ ○ ○● ○
twadʒikṵ:lĭ:la	L L **L** R L	○ ○ ○○ ○● ○
twadʒibutukĭla	L L **L** L R L	○ ○ ○ ○ ○● ○
twakileŋganakĕ:a	L L **L** L L R L	○ ○ ○ ○ ○ ○● ○

5.7.4.2. 禁止

否定辞：- ikí- ，語尾： -a 「君は～するべきではない」

− O辞	音節単位	モーラ単位
gwikíba:ga	L H **L** L	○ ● ○○ ○
twikíbe:ŋga	L H **L** L	○ ● ○○ ○
gwikígolo:la	L H **L** L L	○ ● ○ ○○ ○
gwikíkṵ:li:la	L H **L** L L	○ ● ○○ ○○ ○
gwikíbutuki:la	L H **L** L L L	○ ● ○ ○ ○○ ○
gwikíleŋganake:a	L H **L** L L L L	○ ● ○ ○ ○ ○○ ○

5.7.4.3. 否定接続法・禁止法のまとめ

否定接続語尾の声調は，完了現在形や接続語尾と同様に，ポーズ直前に位置するために左隣にずれて現われているが，本来はそれ自体がHを持っている。否定接続形を見ると語根のHをキャンセルするという基本語尾と同じ規則が働いている。この現象は「基本語尾の規則」と合わせて次のようにまとめられる。

「基本語尾および否定接続語尾は動詞語根のＨをキャンセルする」

否定接続法と禁止法の活用形の声調パターンを解釈してみると次のようになる。

5.7.4.1. 否定接続

－ O辞

tu	i	bú	tu	ki	lá	
○	○	●	○	○	●	基底声調
○	○	●	○	○	●	モーラ数決定 ii
○		●	○	○○	●	モーラ数決定 iii
○		○	○	○○	●	基本語尾の規則
○		○	○	○●	○	規則１
twi		bu	tu	ki:	la	

＋ O辞

tu	a	dʒi	bú	tu	ki	lá	
○	○	○	●	○	○	●	基底声調
	○	○	●	○	○	●	モーラ数決定 ii
	○	○	●	○	○○	●	モーラ数決定 iii
	○	○	○	○	○○	●	基本語尾の規則
	○	○	○	○	○●	○	規則１
	twa	dʒi	bu	tu	ki:	la	

5.7.4.2 禁止法

－ O辞

tu	i	kí	bú	tu	ki	la	
○	○	●	●	○	○	○	基底声調
○		●	●	○	○	○	モーラ数決定 ii
○		●	●	○	○○	○	モーラ数決定 iii
○		●	○	○	○○	○	規則２
twi		kí	bu	tu	ki:	la	

5.7.5. 「特殊」な環境の場合の声調

これまで動詞の構成要素が一般的な音節構造をしている場合と活用形が単独で現われる場合について述べてきたが，次にそれ以外の場合の声調の現われ方について述べる。

5.7.5.1. O辞 /S辞が鼻音の場合の声調

1人称単数のS辞 n- が語根に直接付く場合は，音節を作らないので声調も現われない。S辞が音節主音的鼻音の場合には，CV 音節のS辞の場合と同じである。

例：-lɔ́mb- 「買う」

(完了現在)

「私は買った」	nɔ̂:mbǐ:tɛ		F	R L
cf. 「彼は買った」	dʒulɔ̂:mbǐ:tɛ	L	F	R L
cf. 「君たちは買った」	ṇdɔ̂:mbǐ:tɛ	L	F	R L

O辞が -Ṇ-(2pl./ 3sg.)の場合，O辞の声調は左隣のモーラにずれて現われる。O辞が -n- (1sg.)の場合はO辞が付かない形と同じ声調パターンになる。

例：-kúlalil- 「～のために畝に土をかける」 (-kúlil- の適用形)

(完了過去)

「彼は君のために畝に土をかけた」	dʒu-gú-kuláli:lɛ	L H L H L L
「彼は彼女/君たちのために畝に土をかけた」	dʒú-ŋkuláli:ɛ	H L H L L
「彼は私のために畝に土をかけた」	dʒwa-ŋgúláli:lɛ	L H H L L

(完了現在)

「彼は君のために畝に土をかけた」	dʒu-gu-kúlalĩ:lɛ	L L H L R L
「彼は彼女/君たちのために畝に土をかけた」	dʒu-ŋkúlalĩ:lɛ	L H L R L
「彼は私のために畝に土をかけた」	dʒu-ŋgúlalĩ:lɛ	L H L R L

5.7.5.2. 動詞語根が CV の声調

CV に分類した動詞語根，つまり基本形が -Ca で現われる動詞（5.3.1.参照）を活用させる場合，完了語尾と基本語尾以外を用いる活用形では，語根頭の子音の前に/ ku /を挿入した-kuC -という形の語根としてしか用いることができない。従って，声調パターンもこ

れまで述べてきたCV語根以外の語根の場合と同じである。基本語尾と完了語尾を用いる活用形では，/ ku / の挿入の有無によって以下のように声調パターンが異なってくる。

-lé-「食べる」

	-CV-	-kuC-
－O辞		
(不定形)	kû:-la	kú-ku:la
(完了過去)	dʒwa:l̂i:lɛ　L FL	dʒwakúl̂i:tɛ　L H FL
	< dʒu-a-lé-ili	< dʒu-a-kúl-iti
(完了現在)	dʒulí:lɛ　L HL	dʒukúl̂i:tɛ　L H RL
	< dʒu-lé-ilí	< dʒu-kúl-ití
＋O辞		
(完了過去)	dʒúgul̂i:lɛ　H L FL	dʒugúkul̂i:tɛ　L H L FL
	< dʒu-a-gu-lé-ili	< dʒu-a-gu-kúl-iti
(完了現在)	dʒugúl̂i:lɛ　L H RL	dʒugukúl̂i:tɛ　L L H RL
	< dʒu-gu-lé-ilí	< dʒu-gu-kúl-ití

左の列は/ ku /を挿入しないCV語根の場合，右の列が/ ku /を挿入して語根が-kuV-となる場合である。CV 語根の場合，O辞が付かない形では，語根の母音は声調と共に語尾の母音に融合されるため，kuV語根の場合と比べるとHの数がひとつ少なくなる。O辞が付く形では， kuV 語根の場合には，HがO辞（完了過去）あるいは語根（完了現在）にあるが，CV語根の場合には，それぞれ左隣のモーラにずれて現われている。

5.7.5.3. 後続語がある場合の声調

後続語がある場合と後続語がない場合との間には基本的には違いはないが，名詞の場合と同様に新たに規則が適用されて表層的には次のような違いがでてくる。

① 孤立形では語末のHが末尾になるため，そのHは左隣のモーラにずれて現われるが，後続語が付くとHは本来の位置にもどる。

(完了現在)

tulɔ̂:mbî:tɛ　「私は買った」

tulɔ̂:mbití kibê:ga　「私は土鍋を買った」

②後続語がHで始まる場合には，動詞語末のHはキャンセルされる。

（完了現在）

tulɔ̂:mbiti lúhạ̌:gi 「私は皿を買った」

③単純過去形，当日過去形，O辞が付かない単純現在形に後続語が付くと語根のHがキャンセルされる。

（単純過去）

kibéga sẹ: twagólúla:dʒɛ
「我々が洗った土鍋」

kibéga sẹ: tulúgolúla:dʒɛ
「我々が洗ったその土鍋」

twagolula kibê:ga
「我々は土鍋を洗った」

tulúgolula kibê:ga
「我々はその土鍋を洗った」

（当日過去）

tugólulǎ:dʒɛ
「我々は今日洗った」

tulugólulǎ:dʒɛ
「我々はそれを今日洗った」

tugolulá kibê:ga
「我々は土鍋を今日洗った」

tulugolulá kibê:ga
「我々はその土鍋を今日洗った」

（単純現在）

tugólo:la
「我々は洗う」

tulúgolo:la
「我々はそれを洗う」

tugolo kibê:ga
「我々は土鍋を洗う」

tulúgolo kibê:ga
「我々はその土鍋を洗う」

①は，後続語が付くことで適用されていた規則がキャンセルされた例であり，また②は，動詞と後続語の境界でHが重なることで新たに規則が適用されている例である。③についても，単純現在形の場合は後続語が付くことによってこの動詞が属している音韻単位内にHができるため，「Hが語中（音韻単位）にひとつもない場合には語頭から２モーラめがHになる」という規則がキャンセルされた結果であると考えられる。これらは名詞の声調の場合にも見られた現象である。

さて，③の単純過去形と当日過去形についてはどのように考えるべきであろうか。現時

点では，この現われ方を導き出している規則については解明できていないが，これは後続語自体が及ぼしている影響ではなく，そのことによって語末の/dʒɛ/が省略されたことによる現象であると思われる。

5.7.6. 動詞の声調のまとめ

以上，マテンゴ語の活用形の声調を概観することで，動詞構成要素の声調と活用形の声調パターンについて検討してきた。マテンゴ語動詞の声調について，その特徴と規則をもう一度まとめる。

（Ⅰ）動詞の構成要素のうち，時制辞，語根，語尾は固有の声調を持つ。
それ以外の要素は指定がない（最後まで指定がないものはＬで現われる）。

時制辞：	過去	-a-	（Ｌ）
	未来	-í-	（Ｈ）
	ただし，Ｏ辞が付かない接続法・希求法では -i- （Ｌ）		
	移動	-aká-	（ＬＨ）
	ただし，Ｏ辞が付かない接続法・希求法では -aka- （ＬＬ）		
語尾：	完了過去	-itɛ	（ＬＬ）
	完了現在	-itɛ́	（ＬＨ）
	非完了当日	-ádʒɛ	（ＨＬ）
	非完了非当日	-adʒɛ	（ＬＬ）
	基本語尾	-a	（Ｌ）
	接続語尾	-í	（Ｈ）
	ただし，Ｏ辞と時制辞が付かない接続法では -i- （Ｌ）		
	希求語尾	-adʒɛ́	（ＬＨ）
	ただし，Ｏ辞と時制辞が付かない希求法では -adʒɛ- （ＬＬ）		
	否定接続語尾	-á	（Ｈ）

語根：　Ｈ　ただし，時制辞，語尾の声調あるいは性質に優先される。

（Ⅱ）声調は，モーラ数が決定された後，各モーラに配分され，そこに規則が適用されて表層化する。規則には，①活用形に由来する規則，②音韻的な規則，がある。

モーラ数の決定

- ◆ 完了語尾は「語尾変化規則」で１モーラ少なくなる。

- ◆ 時制辞が付いてＳ辞の母音が半母音化した場合，後ろに３音節以上続けば短母音化して１モーラ少なくなる。
- ◆ 次末音節は常に２モーラになる。

①活用形に由来する規則

基本語尾，否定接続語尾を用いる活用形では語根のＨはキャンセルされる。

②音韻規則

(1) 語尾にＨがない場合は語根のＨが右隣のモーラに拡張する。
(2) 時制辞の右隣の要素は時制辞と逆の声調で現われる。
(3) Ｈが３つ現われると，中央に位置するＨはキャンセルされる。
(4) 末尾のＨは左隣のモーラにずれて現われる。ただし，ずれることでそれが元々あったＨと連続してしまう場合は，Ｈは左隣にずれることなくキャンセルされる。
(5) Ｈが全くない場合には前から２つめのモーラがＨになる。

5.8. まとめ

この章では，動詞を形態論の立場から考察した。具体的には，動詞の構成要素を，文法呼応に係わるもの，意味に係わるもの，活用に係わるものに分け，それぞれの具体的な現われ方や機能を示すとともに，それらが形成する動詞の派生形，活用形の用法について述べた。声調に関しては，活用形の声調パターンを概観することから，各要素，活用形の声調を解明した。

マテンゴ語文法を解明する上でもっとも重要であると思われる動詞構造の概要をつかむためには，できるだけ網羅的に現象とその用例を示す必要があると考えたため，未分析のまま現象を示すにとどまったところもある。